

ドノウが直す 命の道路

簡単な技術・低コスト 11カ国に広がる

土嚢を使った、日本発の道路整備の技術が、アジアやアフリカの途上国に少しずつ広がっている。人々と市場や医療サービスをつなぐ道路は、貧困克服のカギを握る。安くて簡単な工法で住民が自ら道を造り、道を直す。その持続可能性にアジア開発銀行も注目し、事業に採り入れ始めた。

パプアニューギニア

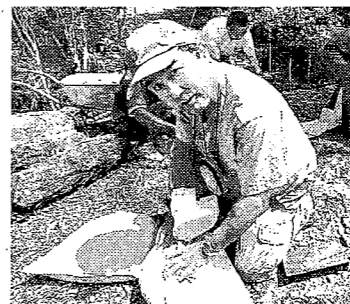
市場、医師へつなぐ

太陽が照りつけるパプアニューギニア高地。今年1月、西ハイランド州都マウンツハーゲンから10キロの山間にあるモゲ族の集落は高揚感に包まれていた。道路整備を喜ぶ女性たちが、歌いながら踊り始めた。

集落から、車が通れる幹線道路までの距離は1.5キロ。この日の作業は、途中の川にかかる長さ11メートルの丸太橋のかけ直しだ。両岸の地盤を土嚢で補強する。この集落では、収穫したキヤベツやサツマイモを売って運ぶ、市場に向かう業者が売っている。人力で運ぶのは1日せいぜい50キロ。耕地があっても市場に出せなければ作物は余るだけ。集落リーダーのジョンさん(47)は耕地の3分の1しか使っていない。



土嚢を並べて地盤を補強するモゲ族の男性たち。手前が老朽化した丸太橋



性は3倍になるといふ。さらに4時間、車で奥地に進んだ別の集落ではアジア開発銀行の事業が進む。ここには近隣住民約4千人が頼る救護所がある。だが幹線道路への山道は10キロもあるうえ、土の道は轍でこぼこ。雨期は水がたまって通行不能になる。ヘルスワーカーのマソさんは「医師は幹線沿いまでしか来ない。この赤ん坊に必要な薬の補充にも来ない」と、傍らで母親に抱かれてせき込む赤ちゃんを見やった。

アフリカ諸国

住民が補修収入増も

木村教授が土嚢による道直しに取り組みようになっただきつかけは「ほんまもん」の研究者は、簡単な技術で人々を幸せにできる」という12年前の恩師の言葉だ。その後、ケニアの大学で教えていた時に、先進国のインフラ援助は幹線道路までで、人々の生活道路にまでは届かないことを知った。大雨の度に通れなくなる未舗装道路は、農民を市から遮断し、現金収入の道を閉ざしていた。「道は自分たちで整備、補修できる」。住民がそう気付くことが持続可能な開発だと考え、「現地調達できる材料で、安く簡単に直せる技術」を追求した。先進国が整備した舗装道路が、穴ができたまま放置されているのを何度も見てきた。現地には直す技術も、材料を購入する資金力もないからだ。

そのころ土嚢の耐荷力を実証した本を読み、「これだ」と考えた。土嚢袋は1枚25円。1メートルの道を直すのにかかるコストは約5000円と、アスファルト舗装の20分の1だ。「当然、耐久性では舗装道路に劣る。交通量によっては数年で袋が破れるかもしれない。だが、その時は住民が直せばいい」と木村教授は言う。この道直しが最も広がっ

ているのがアフリカだ。道普請人は、ケニア、ウガンダ、タンザニア、ガーナ、コンゴ(旧ザイール)、カメルーン、ザンビアの7カ国で道直しを実施。ケニアでは主要英字紙スタンダードが昨夏、大きく取り上げた。「ドノウ技術がケニアで広まっている」。土嚢がdo-nohになった。木村教授から得た技術をケニアで伝えているマルガさん(33)は言う。「袋で道直しなんて最初はショックだと思ったけど、これなら自分でもできるとわかった」。道を直した後、市場への農作物の運送費が3割減り、農民の収入は5割増えたという。アジア開発銀行の社会開発スペシャリスト、田中倫子さんは「土地に適した工法と材料を探しだし、現地に技術を伝え、更なる技術移転に成功している。アジアでも活躍して欲しい」と期待する。ドノウによる補強部分は、アフリカ、アジア11カ国で計13キロにおよぶ。(パプアニューギニア中部マウンツハーゲン)金成隆一